令和7年度宮崎県スポーツ推進審議会 議事録

I 日程等

1 日 時：令和7年7月8日（火）

2 会 場：県庁本館講堂

3 出席委員：藤本 格 委員、高木 美里 委員、川野 美香子 委員、
金川 敏洋 委員、岡本 真奈美 委員、横山 幸子 委員、
谷口 行孝 委員、長尾 岳彦 委員、玉城 美千子 委員、
松元 春香 委員、竹元 明子 委員、米丸 麻貴生 委員、
山本 順之 委員、宮田 若奈 委員、遠坂 有太郎 委員

(15名)

II 概要

1 副教育長あいさつ

2 委員紹介

各委員より自己紹介

3 内容

(1) 説明

令和7年度宮崎県スポーツ推進審議会について

事務局より説明

発言者	発言内容
議長	○ 事務局の説明について、質問等がないか。
委員	○ なし

(2) 協議

ア 宮崎県スポーツ推進計画について（協議前説明）

- ・ 施策10 幅広い世代でのスポーツの推進
- ・ 施策11 児童生徒の健やかな体を育む体力・健康づくりの推進

アについて事務局より説明

発言者	発言内容
議長	○ 事務局の説明について、質問等がないか。
委員	○ なし

イ 宮崎県スポーツ推進計画に基づく本県スポーツ推進の現状と課題について（協議）

「共生社会の実現に向けた本県スポーツの推進に関する現状と今後のあり方について」

発言者	発言内容
議長	<p>○ 共生社会の実現に向けた本県スポーツの推進を中心に、様々な視点でそれぞれの立場から自由に御意見をお聞かせ頂きたい。</p>
委員	<p>○ 今年度も私の総合型クラブでは委託金や助成金をいただきながら共生社会について取り組んでいる。クラブは2011年に設立され、障がい者の支援事業所の方たちとフライングディスクを開始した。14、5年ほど前から県民総合スポーツ祭に出場し優勝も経験したが、途中指導者不足で休む期間もあった。令和4年から再びスタートしている。障がい者の方を集めることから考え始めた中で、自分が行っている障がい者就労支援施設の利用者の方に月1回ニュースポーツを体験してもらうことを1年目は行った。2年目は共生社会ということで、総合型クラブの子ども達と一緒にいき、今年度は就労支援施設の方に運動を行ってもらうことを続けている。しかし、問題は送迎であり、私も含め保護者や放課後デイサービスの協力のもと送迎を行っている。</p> <p>○ 私は中級パラスポーツの資格を取得しているが、他の指導者もアダプテッドスポーツ研修会を通して興味を持ち、初級パラスポーツの資格を取得しようとしている。総合型クラブの中には障がい者と健常者を分けずに活動を行っているクラブもあり、今後そのようなクラブが増えていくと思う。</p>
委員	<p>○ 地域スポーツクラブの方で福祉事業所もしていると、うまく相互連携ができ、地域づくりにつながると感じた。送迎は大変で、NPO法人や障がい者施設から送迎用車両の助成をしてほしいという依頼が多い。スポーツ活動は送迎が必須であることを改めて認識した。</p> <p>○ ねんりんピックにおいて、競技団体に非常にお世話になっているが、シニアスポーツの審判を若い人がしたり、同じ会場で若い人が競技をしたりする場面から、互いに支え合うことが共生社会であると感じる。また、90歳以上の高齢者が競技を続けていることを見て若手高齢者の励みになり、スポーツを通じた地域作りや居場所作りに大切だと感じた。</p>
委員	<p>○ 宮崎県国スポでホッケー競技の都農町開催が決定し、今年4月に第一競技場が完成した。6月から都農町のエンジョイスポーツクラブの中でホッケー競技も参加させていただいている。また、障がい者スポーツ教室の取組もされており興味をもっている。これから障がい者の方への指導を考えた時、ホッケーはレクリエー</p>

	<p>ションスポーツとして、程度に合わせてできるので参入していればと考えている。また、競技の中でも障がい者に対する視点をもって入っていく指導者もいるので、そういった人たちを巻き込みながら新しい展開ができるのではないかと考える。また、NPO法人オールティックスホッケークラブが12年目を迎え、指導者も輩出しているため、様々なところに挑戦していき、ホッケーの知名度を上げるチャンスにしていきたい。</p>
委員	<p>○ 私は直接こういう形の活動に取り組んではいないが、都城のぼんちクラブが特別支援学校と連携をしていることから、競技の枠を超えていろいろな指導者が育つように、視点を広めて取り組んでいければと思う。</p>
委員	<p>○ 様々なインストラクターが県内にいるため、県の依頼として障がい者支援施設等でダンスを踊ってみたり競技をやってみたりすることも、共生社会の普及の一つの方法なのではないかと思う。競技の面では、他県のパラアスリートを自治体職員として採用や、競技を仕事として成り立たせ、指導者として迎えることも競技力向上や共生になると思う。パラアスリートを目指している中高生を、基準を設けた上で中体連や高体総体の一部の競技に招き、一緒に競技をしていくことができればよいと思う。健常者と障がい者が、互いに競技を通して学ぶことも共生の形につながると思う。</p>
委員	<p>○ 共生とは、障がい者だけでなく不登校やフリースクール、外国人移住者等も含まれるのではないか。フリースクールにも子どもはたくさんいて、体を動かすことは好きなのではないか。目に見える施設や何かの括りに入っている機関にだけ情報がいくのではなく、もっと広く見てどこに何が必要なのかということを見定める必要があると感じた。体を動かすという視点で言えば、みんなが競技に出ることだけがスポーツではなく、生きていく、長生きしていくところでいうと、すごく広い視点が必要ではないかと思う。</p> <p>○ 私はちんどん屋として、高齢者施設や障がい者の施設等へ訪問した際、気がついたらいつもよりたくさん歩いたという声を聞くことがある。結果的には運動にもつながる。共生社会の取組を考えた時に、世代を超えたという部分が必要なのではと感じる。</p>
委員	<p>○ 子どもを預かる中で、近年発達に課題のある子が増えているが、それが本当に障がいという形なのか、社会の変化、養育のスタイルの変化なのか分かりづらい部分もある。ただでさえ少子化で子どもが少ない中で、発達に課題を抱えている子どもが増えていることは大きいことである。10年後の社会を考えたとき、発達に課題を抱える子どもが自分の見立てと違うことや負けることをなかなか認めきれなかったり、ルールを守ることが難しかったりというところで、様々な困難を抱えている。社会の中で経験や体験を通して生きていくスキルを学ぶことができる子がいる</p>

	<p>一方、そこを強要することでギャップに折れてしまい社会に適応できなくなる方もいると考えたとき、宮崎県にいる子どもたちが少しでも自分のもっている力を、できる子はどんどんできるようになってもらいたいし、できない子たちを折らない社会を作っていくことが大切だと思う。だからといって、全部守るのではなく、適度な刺激の中でその子どもたちができるようにはどうすれば良いかということについて現在考えているところである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども家庭庁が令和5年に「初めの100ヶ月の育ちビジョン」を発表し、妊娠期から小学校1年生までの100ヶ月が大切であり、その期間にどれだけの手をかけられるかが、これからの社会のためになるかと言っている。その時期に子どもたちが安心して挑戦できる環境を保証し、権利を守りつつ、最終的にできる子どもたちは競技スポーツに行くことや、できない子どもたちが失敗から引きこもるのではなく、自分のペースで何か体を動かすところに至るように、最初の窓口である私たち保育が頑張らなければならない。 ○ 子ども家庭庁は、昨年から5歳児検診を推奨しており、就学前の検診を基に学校が対応をしやすいようにしている。宮崎市は今年から5歳になる子ども全員向けの5歳児検診を始めた。保護者のアンケート結果と園職員のアンケートの結果を両方兼ね合わせ、早めに養育や支援に結びつけるようにしており、それらを踏まえ、どんな形で関わっていくかを見ながら、先ほどの話にもあるように勝ち負けがはっきりしているとかんしゃくを起こしてしまうが、ニュースポーツのような様々な形を幼児教育の中で取り組んでいき、体を動かして色々なことができるようにしていけたらと思った。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ さまざまな意見を聞く中で、共生社会の実現には多様性を認め合うということが必要であると思う。小学校は6歳差はなれた児童がおり、様々な性、環境で育った子がいる。その中に障害をもつ子もいる。そのため小学校は良い学びの場になっていると考える。 ○ 様々なところで男女混合になっている。陸上の世界マイルリレーでは男女混合であり、走順も自由。ルールを決めることで子どもたちにうまく定着していく面があると思うので、競技スポーツや小学校のイベントでも多様性を認めるという立場で教育をしていく必要があると改めて感じた。 ○ 私はマスターズにも関わっており、マスターズ陸上は年代別のため、出場クラスで最年少ということもある。一昨年、日南市でパラ陸上と共催で全国大会が開催されたが、多様性を認める大会になり、みんな満足していた。今までの概念を捨てて、ルールを工夫しながらやっていくことが今後必要になると感じた。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 障害のある県北のバドミントンが強い生徒が健常者と同じ競技大会に出場していたことがあり、今後そのような流れに力を入れていくべきである。

	<p>○ 小学校が令和2年、中学校が令和3年、高校が令和4年から年次進行で現行の学習指導から共生という言葉がキーワードに入った。</p> <p>○ 私は体育教員の時、保健体育の授業を通して子どもたちに3つの力を身につけてさせていた。1つ目が、できないことができるようになる知識、技能をつける。2つ目が、工夫し考えたことを人に伝える思考力、判断力、表現力等をつける。3つ目が学びに向かう力、人間性等という態度。例えば、公正に取り組むことや互いに協力すること。その中に共生する態度を養うということが出てきて、2年前から宮崎県中学校体育連盟の研究に入れている。共生を基にしたアダプテッドスポーツがあり、中体連ではこれを意識して誰もが楽しめるようなルール作りや授業作りをするために、アダプテッドシートを作成することとした。意図としていることは、性別、体力、経験、好き嫌い等関係なく、みんなが運動や練習を楽しむためにはどうしたらよいかについて取り組んでいる。</p>
委員	<p>○ 私は、障がい者スポーツと呼ぶことをやめようと言いたい。健常者スポーツとは言わない。スポーツは基本的に特別なルールがあるため、障がい者や健常者であるかは関係なく、ルールの中でルールに従って行えばいいと思う。例えば、国スポ・障スポ、オリンピック・パラリンピック等分けること自体が共生からほど遠い。先ほど委員の話にもあったように、気がついたら障害のある選手が大会に出場していたということが普通にあると思う。障がい者がスポーツをすることは一般的なことであり、共生とは何かを考えた時に誰もが平等に生活ができるとか、楽しく生活ができる、スポーツを行えるということを考えた時には、障がいの有無よりも場といった環境を整え、サポートや一緒にスポーツをする人が支えてくれればよいのではないかと。障がい者スポーツという言葉を使えば、この先、共生というのはあくまでも一緒に取り組んでいかななくてはならないということになる。本来それを当たり前にしてしまうためには、中体連にも参加している生徒さんがいるように、スポーツをするという中に障がい者が参加できることは一般的なことであり、特別なことではないというふうに捉えるべき。その中に、障害の程度によってできる種目を整理していくなど、本来「障スポ」や「パラ」という言い方をせずに、普通の競技会の中に入れる方がいいと思う。</p> <p>○ 海外で異年齢、異種目等を1つの施設の中で行う環境を見たときに、これが本来のスポーツをみんなで楽しむ場と感じた。日本は、限られた時間だけ競技場を使用する場合でも、1つの団体が終日貸し切ることがある。例えば同じ人工芝のグラウンドでサッカーとホッケーが隣り合わせてするといった競技別の割り振りや時間調整等をすれば、いろんな方がもっとスポーツに取り組むことができる。</p>

	<p>○ 私は県の部活動の地域移行のコーディネーターもしており、中学校の部活動をどうするかという話をしているが、特別支援学校の生徒さんについてはほぼ手つかずの状態である。特別支援学校に通う中等部の生徒を入れているという話では、専門の指導者が入っており、こちらの方が早く地域展開になっていくのかもしれない。しかし、それも含めて各市町村の中学校と特別支援学校の生徒を混ぜて一緒にやれば、指導者の確保も可能になっていくところもあるのではないか思った</p>
委員	<p>○ 7月6日（日）に三股町で町民スポーツ祭の種目として卓球バレーを行った。多くの方が参加し、その中に都城泉ヶ丘高校の生徒や藤元病院の看護学校の生徒がボランティアでサポートをしつつ、一緒に入りながら楽しんでいる光景を見た。その大会を開催するにあたり、教育課のスポーツ振興係、福祉課、社協の3団体が中心になり大会を開催し、やはり多くの関係者も必要だと思った。その中で、施設が充実しているということも大事だと感じた。また、この時期に空調がないとおそらく開催できない可能性もあると感じた。</p> <p>○ 都城に陸上競技場ができた。実際に完成すると非常に良く、ラグビーやサッカーの試合も開催される。最近の基準で作るとバリアフリー等いろんな形で使いやすい。県の陸上競技場は50年以上前にできたため、バリアフリー化するためにスロープを作ったが使い勝手が悪い部分もある。最初から考えて作っている競技場は非常に使いやすい。グラウンドからそのままスタンドにも上れることや、暑い中で影になる場所もたくさんある。そういう意味でやはり大規模で充実した競技場ができるということが、共生社会の誰もが一緒にスポーツを楽しむということになる。ハード面の充実として県営プール、アリーナ等もできており、施設が充実していくことも一つの視点だと感じたところである。財政面を考えつつ、そういう視点でハード面の取り組みも大事と感じた。</p>
委員	<p>○ 本県のパラスポーツについては、昔は少ない内容の中で少人数で支えていたが、現在の取組状況を知り、本審議会で一般のスポーツの先生方とパラスポーツを共に一緒に考えていける機会が設けられたということについて、行政の方々に大変感謝している。</p> <p>○ 私が15年前にパラスポーツに関わったきっかけが、交通事故で脊損になった男性の方が陸上の大会に出場した時に言われた「いつか陸上の大会がスポーツだけじゃなく、一般の人と共生してやれる日が来るといいな」という一言であり、現在、共生できるような時代に変わりつつあり、パラスポーツの普及も進んでいると言える。行政の方々が諦めずに一般の皆様へ伝え続けてくれたからこそだとすごく感動している。</p> <p>○ 現在サッカーでは、大会の前に障がい者と中学生と一緒に試合をすることが実現し、陸上に関しても3年前ほど前からダウン症</p>

	<p>測定会を奥松先生が行政の方たちと力を入れて開催しており、ダウン症測定会を一般の中学生、高校生が審判する等のサポートをしつつ、ダウン症の試合が終わった後は中学生が試合をする形で、確実に共生は進んでいる状態になっている。そのようなサッカーや陸上のやり方を各競技の中で、何かしら簡単なイベントでも構わないのでやっていけば自ずと競技が増えてくるのではないかと感じる。一般の競技面しかわからなかったけれども、障がい者スポーツのことだけで考えてみると、実は意外にできることがあったという気づきをいかに競技団体の先生方が感じるかで、障がい者スポーツはもっと増えていくのではないかと考える。</p> <p>○ 私は理学療法士として整形外科でデイサービス等にも関わっており、先日デイサービスでパラスポーツのボッチャの練習を行った。利用者は障がいのある方が多く、一般のスタッフと一緒にボッチャを通して競技を楽しむ取組を行ったことが大反響となった。今後デイサービス等も年齢や障がいを問わずできるスポーツを取り入れられる分野になってくるかと思う。デイサービス等では5年、10年と「歩けるようにがんばろう」といった、みんな同じ目標で掲げているため、誰かと関わること、目標を持つこと、楽しさを感じることがスポーツの醍醐味だと思うので、デイサービス等に関しても、できればスポーツをどんな人でも取り組める環境を作っていくことができるのではないかと考える。</p> <p>○ 障がい者スポーツ協会の方たちと15年間活動してきたが、現在その先生方が高齢になっている。障がい者スポーツを広めようと言っている中で、SNSの活用や発想力がある若い人も取り入れていき、その先生方と一緒に活動し、若者が下から支えていけるような環境作りをと考えている。また、あと3年乗り越えるためにも温かい目とお力添えをいただきたい。</p>
委員	<p>○ 私は、誰もが高齢になり、事故に遭い、今できることができなくなるかもしれないと授業の中で伝えている。移動手段の課題については、デイケアや病院へリハビリに行きたいが、田舎から遠いため交通費がかかるといったことや、父兄や家族への負担が大きいというものがある。高齢者であっても、不自由な方であっても利用できるような移動手段や、日常的に予約しやすい公共サービスがあるともう少しスポーツにも参加をしやすくなるのでは考える。また、県を挙げて考える必要がある。</p> <p>○ 女性は骨粗鬆症になり易く、日常生活で骨折することもあるため、社会の環境づくりもしてほしい。また、自宅でも要介護になったから手すりをつけるとかでなく、設計の段階で転倒、骨折を未然に防ぐ対策をする社会になってほしい。</p> <p>○ 私は食の分野にいるため、食と運動は切り離せないと考えている。例えば施設を作るとき、ユニバーサルデザインの家具やキッチンの設置等環境的な面も進むと、運動もしやすく、そこで栄養補給もしやすくなるのではと考えた。</p>

	<p>○ 自宅でも筋トレやスポーツのつながりをオンラインで楽しく、かつ、それがきっかけとなって公の場に出てレクリエーションやスポーツ大会の参加につながると良いのではと思う。</p>
委員	<p>○ ファミリー健康体力向上事業を全国で取り組んでおり、ファミリー体カテスト測定会を実施する予定になっており、2019年度に宮崎で開催希望申請をしたが、コロナでできなかった。その後、中央に2人派遣してコーディネーターの資格取得をしてもらい、宮崎のスポーツ推進員に講習をしてアドバイザーを育成した。翌年、26市町村に測定会の実施を呼びかけ、延岡市と都城市は以前から体カテストをしていたことですぐ取り込むことができたが、他の市町村は全くしていなかったため、希望があったのは日南市、西都市、日向市だけだった。3市は初めてであったため、コーディネーターと役員がリハーサルや研修会して実施することができた。</p> <p>○ 延岡市にあるワイワイスポーツクラブをスポーツ推進員で盛り上げていこうということになり、活動場所として小学校を一つ見つけることができたが、そこをどのような教室にするか話し合いをする中で、障がい者スポーツ指導員の方が障害あるなし関係なく年齢も誰でも参加可能な教室にしたいということで、お金を取る教室ではなく、自由に来て活動できる教室として、4月の後半から試験的に実施している。現在5人の指導者で運営している。その中でスポーツ吹き矢、モルック、ボッチャ、ピックルボールを行っており、参加者の状態や状況を確認して競技を変え、たくさんの方が利用できるように今後本格的に広報活動も行う予定である。</p>

4 閉会